

【HUTAN】森の通信

13号

# ウータン

1990. 5. 12

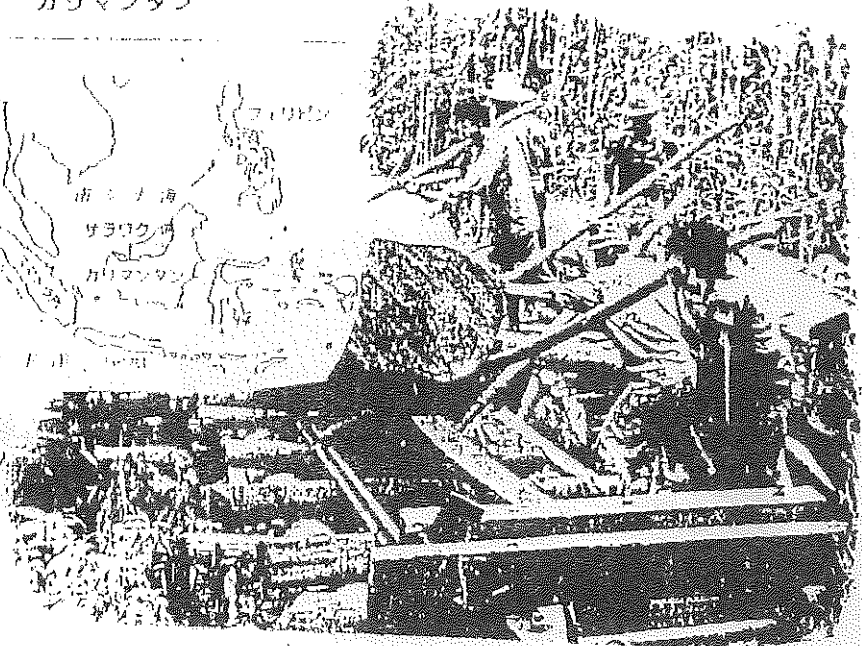
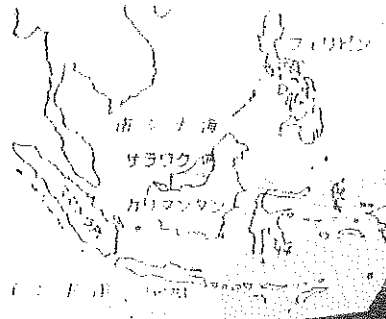
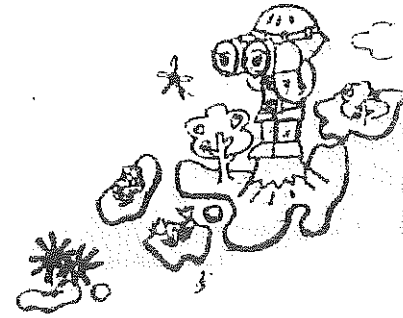
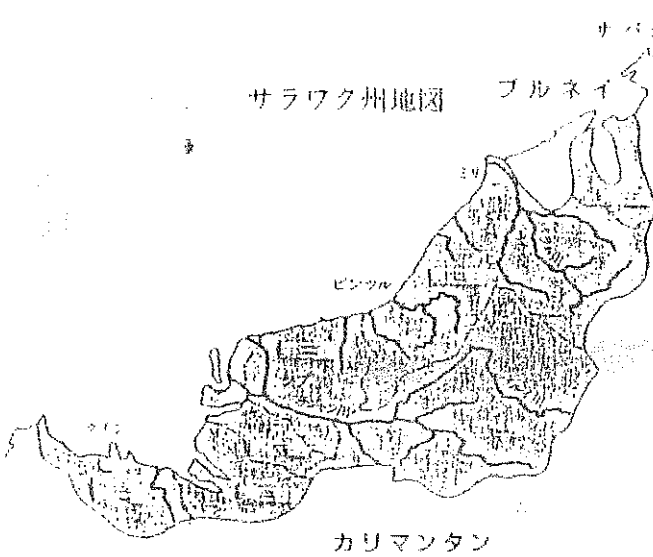
郵便振替 大阪3-3880

大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館308

「自然を返せ! 関西市民連合」事務局気付 郵 06-372-1561

## サラワクの先住民

### を訪ねて



# 100

えん

四月二十七日より二週間、再びボルネオ島サラワク州を訪れることになった。

獣が逃げて、果物や薬草がなくなつて、先住民の人々は州政府や伐採会社などを相手に裁判を起こした。今年になつてもブロードは行われている。まだ伐採が続いているからだ。

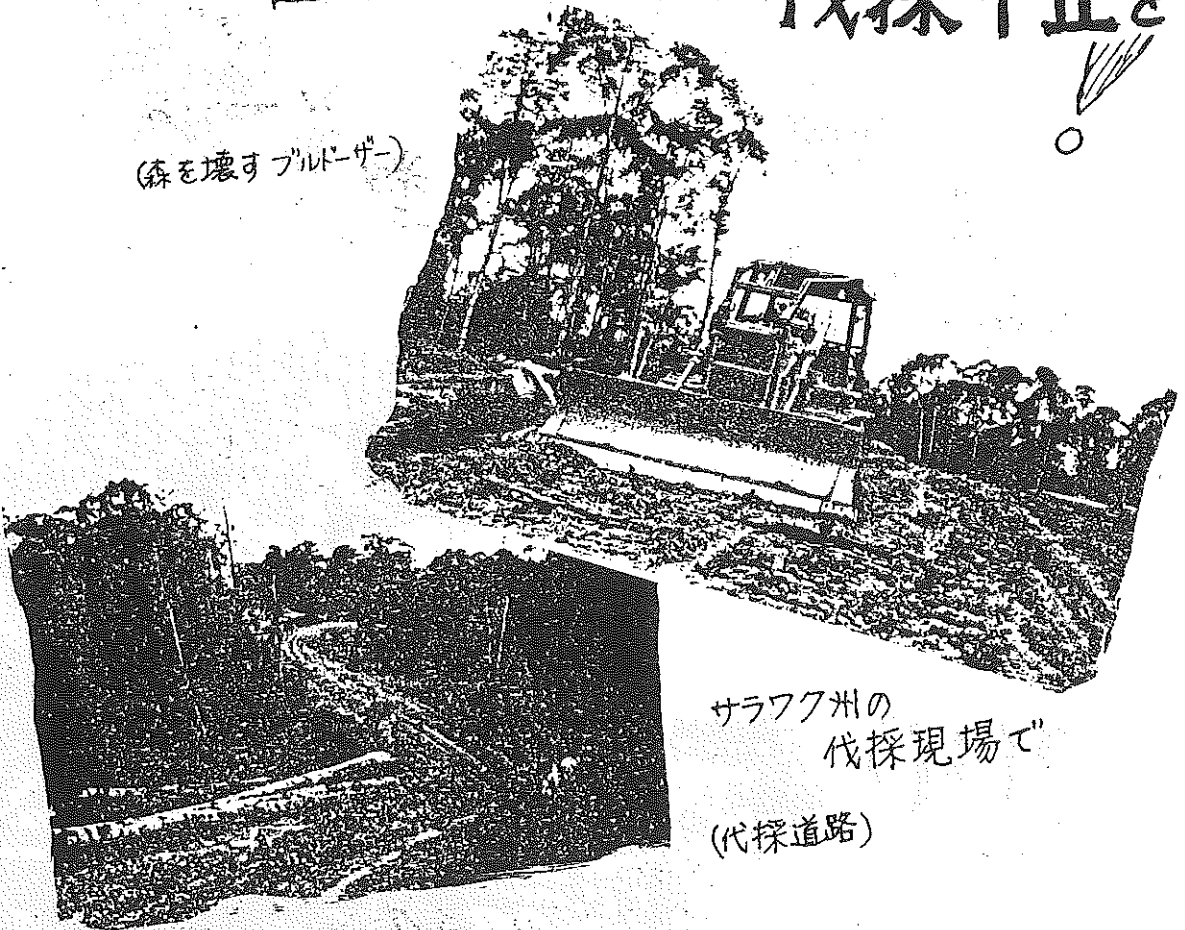
今回の訪れ先は、カヤン族の住むウマ・バワンとプナン族の住むロング・イマン、そして伐採現場など。

今、サラワクはどのような状態になっているのだろうか。合同調査団も問われるものは大きい。我々はいま何をなすべきなのか。

壊され続ける  
サラワクの森

即時  
伐採中止を

(森を壊すブルドーザー)



サラワク州の  
伐採現場で

(伐採道路)

# なぜ熱帯林伐採なのか……？

シンガポールを経由して、四月二十七日夜、大西弁護士とマレーシア・ボルネオ島のサラワク州都アチンに着く。明日は東京から来る林、藤田西弁護士とヒジャーナリストの島さんと合流の予定。その後一つ目のウマバワンでJATAN(熱帯林行動ネットワーク)の黒田さん他三名と落ちあつて、トウツァ川のプナン族を訪ねる二週間の旅だ。

今回の目的は、①伐採地でのような形で伐採されているか、②原生林を壊さず伝統的焼畑を続けているウマバワンの人々がどのような暮らしをしているか、③伐採が異常に進むプナン族はどうなっているか、という調査だ。

アチンから飛ぶ航空機は、ジャンブルを巻きながらミリへと向かう。ちょうど二年前、初めてサラワクに来た時よりミリ周辺の森の立枯れは著しい。曇すまじりに

ミリ空港に着くが、今日の曇りは余りきびしくない。それでも林さんは、顔や腕から汗がじたり落ちてくる。三時間待機して、一向は軽飛行機でマルデイへ向かう。

空からみるとここに乱伐された熱帯林が見える。材を剥いだ伐採道の跡。茶色く濁ったパラム川では、タグポートが木材を河口へと運ぶ。この殆んどが日本へ輸出されているのだ。

二九日、マルデイの町よりパラム川を遡って、船はウマバワンへと進む。ウマバワンは、去る三月、森林伐採中止を訴えに果白したジョブ・J・イボンさんからカマン族が住む村だ。伝統的焼畑をしているカマン族の人々。ウマバワンとは、バワン村の共同体という意味にそつた。川沿いの二次林に居住する村々があり、先住民が暮らすロングハウスが見える。

ロングハウスとは、川沿いの家という意味だ。だが、各村々は木材の運搬港にも変わってきている。

ウマバワンへ行くまでパラム川では、何隻ものタグポートが運搬中。一隻で木材は三百〜四百本を運び出す。それが一日に三十隻ほどだ。運ばれる木材を見ると、直径二、三センチの木材もある。伐採基準は直径六〇センチ以下だから、明らかに違反だ。その上樹齢四百年以上の樹木が次々と切られている訳だ。輸出できる木を何でも切っている筈はない。

今、熱帯林の再生が妨げられているが、それは極めて難しい。こんな巨木を次々と切つてゆけば、サラワクの森もファイリピンの茂みのようになる。なぜこんなにも熱帯林伐採が必要なのか……それは伐採する価値と、輸入してどうする者のためなのか……？ (西岡 良夫)

# 倒される樹の涙を見た！

伐採現場から

四月三〇日、ウマバフンでの二日目

僕たちは村の上流、舟で約三時間半のロング・カシのサンバス伐採会社へ行く。到着後すぐに会社のランドクルーザーで搬出用道具を約三〇分走り、伐採現場の裏前線に着く。道路面はラテライト（赤土）が固まり、舗装路のようであった。また、所々では押し出し工法そのままの土砂が流注、堆積して、木々の正朽れや倒木が多数見られる。この道路が森林生態系を破壊する大きな要因の一つである。伐採ゾーンには小屋が三棟建てられ、小さな子どもたちも数人いる。伐採労働の危険性や緊急性はつとに指摘されているが、この子どもたちは子ども同士の人間関係も形成できぬままに育ってゆくのであろうか。森に住む先住民のみならず、このような伐採労働者の犠牲の上に、僕

たちの熱帯雨林の大量消費の権益が出現し上がっていることを痛感させられた。

ゾーンを数分のところまで又線に入る。ここからはランドクルーザーは入れず、ブルドーザーで行く。ブルは数回しそうならば傾きながら斜面を走り、沢を渡って目標の伐採木の近くに着く。そして、ここから約五〇メートル次々と木々を薙ぎ倒し、窪地を埋めながら伐採を進めてたどり着く。このような伐採のためのブルの走行が、樹木のみならず地表、表土を破壊して、森林の生態に大きな打撃を与えている。一畝当たり六十メートルの伐伐であるから森林の再生は可能であるという言葉は、この現場を見るに何らの説得力も持たない。伐採が周囲の樹木に与える影響の程度が三〇〜四〇％という報告も正しいことが実感出来る。

伐採の対象となった木はカポールで、伐採部分の直径で約25cm、板根を切り落した部分の直径でも約10cm位の巨木である。それがわずか二〇分足らずで切り倒されてしまう。

チェーンソーが切り込むギーンという音が、この巨木の叫び声のようであった。倒された木を、次には三本に切り分ける。チェーンソーが入ると、切り口から衝撃が波のように流れる。まさに生きているのである。木の涙のようでもあり、血のほろほろのようでもあった。

何世代にもわたってサマワグの先住民の生活を支え、そして何百年も生き続けてきた彼が一瞬のうちに倒される事は、われわれ人間の営みの将来を暗示している。僕たちが自然との共存の中で、しかし生きることを出来ないことを自覚して、この犯罪的な熱帯雨林の伐採の中止に向けて運動を展開しなければならぬことを痛感した。

(林良二 蔵田哲)

★ワシントン・シヨウ氏

(ウマ、バフン協賛顧問)

裁判を勝つために、我々の運動を支援してくれて大変うれしい。

我々は新しい世代に受け継いでもらうために、闘いを続け、土地の権利を勝ち取るねばならない。それは伐採許可が企業に一方的に与えられているからだ。森を失って来た我々は、経済的にも生活水準を高めねばならない。新しい生活様式が今必要かもしれない。そのためには闘いを続けねばならない。

州政府は無罪を続けるであろうから、当然我々の闘いは続いていくであろう。だから、日本の人達もぜひ支援を続けるようにしてほしい。

★ムリン・アギン氏 (同顧問)

我々は、單や警察による強圧があつてもくじけず、後進せずに闘います。私はサラフワでの不法伐採と弾圧が世界中に知

らされていくように、そして未来のために闘うのです。

州政府は、我々を犯罪者にしようとしたのです。なぜ、我々の考えや立場を考へようとしなければいけません。このままの状態を続けることは許し難いことです。

特に重要なことを述べます。木材会社によって破壊がもたらされていきます。我々のゲルトアは、このことを他の多くの人々に伝えることが必要と思います。我々は裁判に勝つて、今後も闘います。そのために、喜劇の判決で勝利できるような支援をお願いします。

八七年十月二十九日に我々が逮捕されたので、その日を記念日としています。もし裁判に勝つても、この逮捕された日を記念日にするとしてゆきたい。

★モス・リンガ氏 (アナン族)

我々は森を奪われ、一九六四年から定住させられた。このロング・イマンに来てから、六五年にヤーパン木材会社が八一年にシミマン木材会社がこの付近の

森を破壊しはじめた。

初めは何が起こったか、わからなかった。それは森の破壊だった。ひどい伐採で、我々の生活は破壊された。だから九回もバリケードをしたのだ。一九八六年に四回、八七年に二回、八八年封鎖を行

ったが、我々が二五名とロング・パンガの人々ハロ名も逮捕された。八九年にも八七名とロング・イマンでは一名の逮捕だ。警察等の弾圧は続いている。

遠くから見るとわからないかもしれないが、近づくとも木がなくなっている。原生林があれは獲物も良くとれたが、今は遠くへ行かねばならない。二次林ならブッシュに化しているから逃にたおす危険がある。

伐採に反対するのは、第一に薬草がなくなる。第二に、獣も含めて食物がなくなっているからだ。

政府は定住政策では診療所、学校を造るといったが、病気になると薬草がなくなつてマルデイの町まで行かねばならない。今も昔も、森は我々にとって全てだ。

# 森と生活を考へるつぎあひ、

## 今後ともよろしく……

牛島美成子

この五月から、中米ニカラグアで新  
しく革命を始めることになり、軍の次  
第を詳しく説明すると言はるゝので、こ  
れからその何をするのか、ニカラグア  
共産党も含めて、説明しようと思つた。

ニカラグアは、一存じのとおり、今年  
二月に親米派のチャモロ女史が大統領  
に選ばれ、四月二十五日より新政権が  
発足した。過去十年間、続いたサニテ  
ニスタ氏族獨裁戦線(FSLN)は、極  
めで、平和的に混乱もなく、政權を譲り  
わたした。革命勢力があつた國軍(今ま  
はサニテイニスタ軍)と、アメリカから  
武力援助を受けていた、コントラ(反革  
命分子)との戦いは、一九七九年の革命

後、親族を敵、味方に別け、多数の死を  
看し、傷者も出し、國家予算の五〇%の  
軍事費を吸いとり、アメリカからの経済  
封鎖をもち、民衆の生活を底辺に落  
とし入れた。これが、今回の選挙の敗北  
につながつたのである。とにかく、戦争  
を終わらせ、経済封鎖をとくことが、必  
要最低条件である。

民衆は、FSLNが好まざる。なぜ  
なら、FSLNは独自の社会主義をつく  
り出し、市場経済の導入、警察政權制と  
許り、土地開墾、識字教育、医療制度の  
充実をはかり、死刑制度を廃止した。今  
しまりに動向がつけられてゐる社会民主  
義は、すでにニカラグアの二〇年前に  
スタートしてゐたのである。革命時には

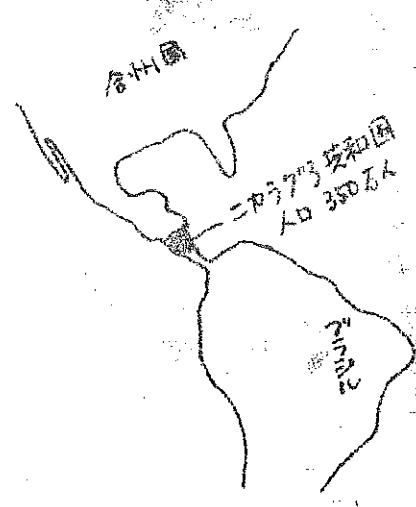
皆が手とりあつて、アメリカから國を  
奪い返しに奮闘がある。民衆は、今でも  
FSLNに期待してゐる。この戦線の時  
を乗り越え、必死や、カモつて、株  
をばばと奪に、新しい國づくりを  
願ふ。

もともと、ニカラグアに行く予定では  
あつたのだが、さらにこのようは、抗議が  
できて、この何もかも新しい國を自分た  
らの位置づけをした。

私と私の夫は、所詮、外國人である。  
夫は、私が必死に勤務してゐた某旅行社の  
駐在員として、ニカラグアに在住してい  
た。その間につきあつてきた人々は、若  
いながら、自分たちの國を何とか至精  
的に、もりあつようと四苦八苦して来た。  
その仲間一人が、太平洋側の小さな村に  
身を、近くにはロアスターがとれる港が  
ある。こういう水産資源を、外貨に変え  
るために、村と旧政府は協力を(ノル  
ウェー政府の協力を得て)ロアスター輸  
出の巨額のプロジェクトを開始した。

とは言っても、全面的に回復できるだけの  
 の資金もないため、独自の節と持してい  
 るもので、政府が認められたものに特権を  
 与えたのである。彼、またわり、私たちが  
 の仲間であるのは、村としていたこと  
 があり、信用もあつたので、特権を与  
 えられた。彼には資金がなかつたので  
 資金面では、日本人である我々が成務をま  
 たつたのである。資金を何に使つたか、そ  
 れがつかぬにテーマとしてあつてくる。  
 我々は、ピラヤ、てお金とかせいでい  
 るか。各種マスコミの通訳と観光客の  
 ガイド、通訳である。皮肉なことに、そ  
 ういうマスコミからの大口の収入は、  
 固く安定して、ニエース任かなくなると  
 全くなくなつてしまつたのである。(とこ  
 かく、そういふにお金の、文ひも、て  
 何と思われようか。一つは、船の小規模  
 で、漁業にくわしい村の人の主流である  
 限り、問題ないのははなりのか。あと一つ  
 は、パニがなくても革命は成功した、と  
 言っている時代は終わったということであ  
 る。やはり、彼らは必要で、外資も

必要である。國の貸入だけではない、何か  
 パーセントのインフレは、みよえること  
 である。  
 資本経済が、一気に入りこむという  
 危険な変化がある。今までは、市場経済  
 といふことも、外国資本は、そんなに多く  
 はなかつた。私たちが、一歩踏みかえは  
 恐ろしい影響を受け、持っているお金を使  
 して、事業をしようとしているのである。  
 一つのことと始めるにあつた。マ、何と  
 基準に、良し、悪しと求めるのか。それ  
 は、諸君の根柢が何である。だからどうする  
 のかと、確かめ確かめするんでいくしか  
 ない。河を横断するものに似ている。水が  
 流れるのであると、つい村の目的地ま  
 でには、水がぶん流されて、おれこしまう  
 自分か当事者でないと、おれこまされて  
 くるというは、リたつて簡単である。レ  
 かし、人はおれこま、何かにおれこま  
 (あるいは、とつても大きい) 問題である  
 と気がかりにしている場合もある。対処して  
 いる。とりよりのためにブルフ場である人  
 だつて、ふしん、こ、おれこまのか、



へえ？ それはえらいことぢや、と腰  
 をまげることか。仕事にかう任ではない。  
 こんなこと、やりてらねばい、と言ふ  
 か。自分には気がかりなこと、自分で  
 は、あきらめられていること、そとはことと  
 出し、あつて、敵は何かと、確かめあつた  
 ことと思つた。  
 私は今考えられていることはどういふこと  
 である、ニカラアアアのこと、試みは、大変  
 重要である。これが、私の場であり、  
 みんなも、各自に場を持つてゐる。それ  
 を今像とも、確かめあつて、こつとと探案  
 したい。現地のからの情報と、おれこま  
 のこと、今後は、よくよく。

# 違法伐採と闘かうサラワフク先住民

(一九九〇年四月三〇日／五月四日インタビュー)

★ジョフ・ジョウ・イボン氏

(ウマ・バワン協議会 議長)

サラワフク州政府は、原生林について先住民の権利がないと言っています。しかし、もともと、又根から我々はジャングルを狩猟や果実採集などで使っており、森の中のことをよく知っているのがその証拠です。だから、我々先住民はジャングルについても権利があると思っています。

木材会社の主張によれば、カマン族が使用する原生林を壊していないと言っている。しかし、対岸のサラワフク・ブレイウッド社は、我々カマン族が権利を持つ土地の原生林を切っており、「彼等がライセンス(伐採許可)をうけた」原生林もこのことと切り倒している。なぜなら、彼等はまず川岸から原生林まで道路を作らねばならない。川から原生林までジャンプ

できない。この周りの全ての原生林を破壊して木材を通すには、我々カマン族の土地を壊らねばならない。

木材会社に伐採を許すのなら、我々の土地がないということではないか。昔から決まっていた法令セクション5の定めたものに、土地の権利がないというのはおかしい。

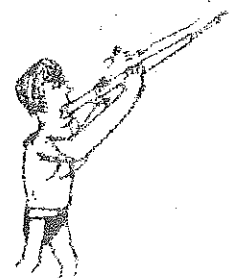
我々、カマンなどは、この森を含めて数百年以上も使ってきた。だからウマ・バワン住民は原生林に対して使用する権利を持っている。木材会社は我々の土地の森を勝手に切ったので、我々はプロケード(道路封鎖)をしたのだ。

もし、木材会社にこのような違法な伐採権を認められるのなら、我々はどうして土地や森の所有が出来るのか。州大臣の妹の所有になっているサラワフク・ブレイ

ウッドの伐採地では、昔から企業が法令に従っていない。しかも、第二次大戦後、勝手に伐採可能地として地図に入れただけ。一九五八年の前に、州政府はなぜ伐採権を手えたのか。

我々は法に従って、原生林を伐採しないうて来た。だが、州政府が法を定めただけで、彼等は自ら法を破って、勝手に伐採権を手えたといい違法をしている。さらにバリケードした我々を四三名も逮捕した。許しがたい事だ。

州政府が勝手に決めたところは、我々もこの土地で使用していた土地だ。政府は伐採権をひいたが、そこは昔から狩猟していた所で、境界などはない。だから裏議甲立てした。我々の木材会社と州政府を相手としての裁判審理は三月二六、七日におえ、次回は判決のみ(高級)だ。





# ウマ、パワン住民による民事裁判とは

四月三日日夜、ウマ、パワン住民協議会議長ジョフさんは、現任アナン議長裁判所にかかっている自分達の民事裁判についての説明を、私達にしてくれた。

この民事裁判は、ジョフさんとウマ、パワンの三人の住民が、州政府、代探ライセンス株式会社、代探会社の三者を被告として、代探行為の差し止め、損害賠償、その代金を求める提議しているもので、去る三月二十六日、二十七日の朝日に審理が行われた。

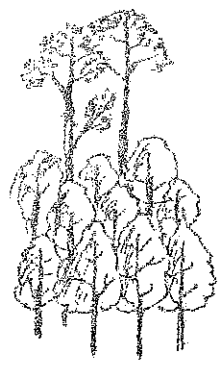
この裁判の主たる争点は、現在代探が行なわれている原生林及び代探会社が設置した代探用林道について、原告らが先住権地としての権利を有しているか、否かという点にある。

というのは、サラワク州工務法（一九五八年）は、一九五八年一月一日以前に先住民が、①地すきを掘削して占有している土地、②薬樹を栽培、③古有地である

耕作地、④墓地および聖地として使用している土地、⑤遺跡のための土地、⑥その他の合法的に使用している土地、については先住権地として認められているからである。

即ち、裁判での原告らの主張は、原生林部分については、そこは自分達が何百年も前から狩猟や果物、薬草の採取に使用してきた土地であり、また代探用林道に使用されている土地については、そこは自分達が耕作や薬樹栽培にずっと使用している土地であって、いずれの土地も前記の土地法によって先住権地として自己の権利が認められているものである、というものである。

そして自分達がそこを使用していたという証拠は、部族間の境界を插いた地図やスケッチ、政府が保管しており、それによって明らかであるとともに、現にこの原生林部分について、どこにも人々が



あり、どういふ地形になっているかを自分達が一番良く知っている、というその事実が何よりの証拠である、とジョフさんは私達に話す。

もし、ジョフさん達のこの主張が認められれば、それがアナン族をはじめ、代探に日々苦しめられている多くのタヤク族達にとって、大きな福音になることは間違いない。しかし、それは州政府の収入の約五割を代探ライセンスのロイヤリティー及びその関連課税に依存している州政府にとって、致命的な打撃につながる結果となる。

文回題には早や判決が言い渡されるという。日本の民事裁判に比べて恐るべきスピードを思えるが、州政府の厚方に感しない判決を期待したい。

(大西 裕子)

# 北米あさひ

## 大田 伊久雄

日本を離れて半年が過ぎた。ここ、北米大陸の片田舎にいと、世の中が平穏で退屈なほどだ。コンクリートと人間に囲まれた忙しい大阪の町にいたのが遙か昔のことのように感じられる。

ここは見渡すかぎり緑の大地。しかし、「森林のあるところ日本企業あり」である。ここでも日本の商社・製紙会社の侵入が新聞紙上を賑わすようになってきている。

現代の日本の繁栄を支えるものが、メーカー、商社、銀行、証券会社等の稼ぎだす莫大な外貨であるとするならば、太陽の没せざる大英帝国が世界中の植民地から金銀財宝をかき集めたのと似てはいまいか。実際、私の勤務していた電機会社は海外に製造・販売あわせて百以上の子会社を持ち、多くの

日本人を派遣している。なるほど武力統治と資本主義経済活動とは、地獄と天国の違いだと、学校では習ったような気がする。でも本当だろうか。

とどまるところを知らない輸出入、貿易黒字、対外債権、そして声高に叫ばれる日本非難の声。これらは何を物語るか。果たして私達は合理的経済活動を行っているのだろうか。それは合法的なのであるうか。倫理的にみて妥当なのであるうか。

結論を先に述べれば、それは極めて合理的でほとんど合法で、超倫理的正義を兼備しているといわざるを得ない。即ち、日本は国際社会において非の打ちどころがない優等生であるともみてよいであろう。但し、よくありがちなように優等生にはどこかに欠点があるよ

うだが……

生存競争と人の言う、弱肉強食と『野生の王国』のナレーターの言う。適者生存とダーウニストの言う。けれど、そういった生物学的次元の話人間社会にもつてくるのはどうか。自分が死ぬぐらいだったら、少々あこぎなことをして他人をだしめいても食べ物を獲得したいぐらいの気持ちはよくわかる。みんなが聖者のごとく人に分け与えてばかりもいらぬまい。しかし、片方で食糧も住み家も無く困り果てている人がいる一方で、車を乗りまわし電化製品に満ち溢れた飽食の生活をすすめる人がいて、後者が前者からなげないものを取り上げていると想像すれば、これは人間の在り方にかかわる哲学的問題であり、強い者は何をして勝手

だという生物学から誤用した論理とは  
次元の違う話であるはずだ。(そして  
日本人の私達と、ボルネオのブナ族  
の人達との関係は、まさにこのあつて  
はならない想定の話と一致するような  
気がするのだが……)

間違いなく自分が人を不幸にした上  
で幸せになつてゐるのだと気づいた時、  
私はこの生き方を続ける訳にはいかな  
かつた。ではどうするか。紙を使わな  
いことが一番良いのだろうか。割り箸  
をやめるべきか。建設時にコンクリー  
ト・パネルを使用していない鉄筋家屋  
もしくは熱帯材を使用していない木造  
住宅に住むべきか。トイレでは手でふ  
くべきか。いろいろと考えたあげく、  
一番適当な答えが浮かんだ。資本主義  
の非人間的な原理から少しでも離れて  
生活を営むこと、つまり企業に身を売  
る渡世から足を洗い、何か別の方法を  
あみ出して生き延びることだと思ひ至  
つたのだ。収入が無ければ消費も減る。

これは何よりだ。そのうち貯金が底を  
つけば一卷の終わりだが、それまでに  
次ぎのもっと健全な商売の一つも身に  
つけられるんじゃないか。そうなつた  
ら、大手を振つて人様に御迷惑をかけ  
ずに生きていけるかも知れない。

一九八八年九月、生まれたばかりの  
長女の顔を見て、ふと込み上げるもの  
があつた。この子の為にも胸をはれる  
生き方を選ばねば。人の親になつたの  
だから。そして一年後、私は一身上の  
都合により会社を退職した。ウータン  
のメンバーの方々のようにタイへもフ  
イリピンへも一度も行ったことがなく、  
ポジティブには何もしていないけれど、  
ネガティブな意味では精一杯東南アジ  
アの人達と心を一にして巨大な何物か  
と闘つてゐるつもりなのだ。今のここ  
ろはこれぐらいで許して貰えるんじゃ  
ないだろうか。

最後にこの話を付け加えたい。最近  
こちらで知り会つたマレーシア・クア

ラルンプールの森林官の方と話をして  
いて、サバ・サラワクの現状をどう思  
うかと尋ねたところ、「私達も憂慮し  
てゐる。しかし、ボルネオ二州は、半  
島政府に對しかなりの自治権を有して  
おり口出しができない。日本の人々に  
私が望むものは、できるだけ消費をお  
さえて木を買わないようにして欲しい  
ということですよ。」との答えを頂いた。  
なるほどな、と思つと同時に自分の考  
えていた方向が間違いではなかつたと  
改めて感じた出会いであつた。

アメリカ・オレゴン州より



収入の部	
88年度繰り越し金	49311円
年会費 (21000円×109)	109000円
他、内12000円は前年度会費引込	
カンパ	130978円
例年会費	52700円
調付札	15000円
通信員	5950円
アジアの本へ	500円
<b>合計</b>	<b>363439円</b>

支出の部	
通信費	93284円
会報使用費	34665円
紙代	27729円
図書購入	22248円
消耗品代	21998円
適合事務所定費 (初月1回～3回)	12000円
講師謝礼	10000円
3月度例会共催会	10000円
雑費	1350円
<b>合計</b>	<b>233244円</b>

89年度会計報告(新年6月～元月4月末)  
 皆様からの協力と理解のおかげで、  
 今年度もこの度殊のな事情により、  
 本年度から会費値上げ(12000円)など、  
 会の充実を期して行なうと聞いています。  
 本誌別

### 質問箱

Q 会費をいつ納入したのが忘れてしま  
 ことが多いので納入の時期を  
 教えて下さい。

A 例えば'89年度の場合、'89年6月1日  
 から'90年5月31日までが'89年度の  
 会費となります。



Q 自然連合事務所(中崎町)には、  
 ウータンのメンバーはいつ頃集まるのでしょうか?

A 基本的には火曜日(オニ・オ四の)  
 夜に集まることが多い時を  
 たまにあるのでTELして見て下さい  
 (06-372-1561) 西園寺川本

### 編集後記

5月の大型連休もあわりましたか  
 ありありありとせんか?  
 ウータンの会は今、大きい集会  
 (ウタ・友)もあわりのことと息  
 とまらぬといふところですが、今度時  
 パンフレット作りにおおわけてします  
 ところが最近中心メンバーの  
 エタミナ切れ(人材不足)の為仕事か  
 左書き)が目立ちます  
 そこで今、会費の人材に協力か  
 ことに大要に合つて来ています

### 今後の活動予定

別(土)ウータン会館PM6:00

黒川府立動物会館

地下鉄谷町線三橋駅 教合

TEL:06-372-1561

(例年の会費より40%引き)

5/20(日)シンガポール政治経済留年

協議のこと、PM1時～5時

場所、豊臣中支労働会館

(阪急)在阪駅下車南へ徒歩10分

連絡先 奥村(06-372-1561)

八七年五月より国内治安法で拘

留中のウータンとアソシエイト  
 変更のハガキを葉書にします。  
 ぜひ参加をお願いします。